

おもしろ! ザ・アリワールド

第2回「アリ採集はトラブル多し!?!」

吉澤樹理^{じゅり}

東京・立教大学教育研究コーディネーター

みなさんこんにちは! 立教大学の吉澤です。ただ今、『身近なアリけんさくブック』を制作しています。前回11月号では、著者の吉澤樹理(わたし)がアリにハマったきっかけをお話ししました。楽しんでいただけましたでしょうか? もし「まだ読んでないよ」という方で、気になる! という方は、ぜひ11月号を読んでみてください。

さて、今月はアリの調査にまつわるよもやま話を紹介したいと思います。

🐜 野外調査で起こること

アリといえば、黒色で行列をつくる……と思われがちですが、実は色・かたち・大きさなどさまざまです。日本で一番大きなアリは、「ムネアカオオアリ」の女王で約2cmあります。子供の手で考えると小指の半分くらいにもなります。逆に、一番小

さなアリは、1mmの「ヒメコツノアリ」と「セダカウロコアリ」です。

からだの大きなアリを追いかけるときは立ったままでもできますが、小さなアリの場合はそうはいきません。最初は中腰で、それでも見えない場合は顔を地面に近づけて、這いつくばって観察します。この姿勢だと、アリが巣穴に入る様子がとてもよく見えるのですが、困ったことに、たいていこの時点で通りすがりの人たちから声をかけられるのです。「大丈夫ですか? 気分が悪いのですか? 救急車呼びますか?」と……。

小さなアリを追いかけると、どんどんまわりの様子が見えなくなります。まるで小さなアリの世界に入ったかのように感じるのですが、まわりの人たちはそんな当人のことなどつゆ知らず、体調が悪いように見えるようです。この夏、編集者の荒木さんと井之頭公園(東京・武蔵野市)でアリを追いかけていた時にも、通りすがりの方から何度も声をかけられました。

ということで、もしアリの追いかける際には、腕や背中に「アリ調査中」などのワッペンをつけることをおすすめします。



撮影にいそしむ著者・吉澤▶

🍷吉澤，連行される

岐阜大学に通っていた頃の話です。大学がある岐阜市には、岐阜城がそびえ立つ金華山（*『たのしい授業』読者のみなさまにはおなじみ、「名和昆虫博物館」がある場所です）があり、金華山からは長良川を見渡すことができる自然豊かな場所です。そんな場所で、大学3年生の時に、自分で20種類のアリの採集するという授業がありました（詳しくは前号2018年11月号／第一回「アリとの出会い」参照）。わたしは授業の合間に金華山に行っは、新しいアリはいないかと探していました。

あれは、金華山の麓でアリ採集をしていた時のことでした。ふと、後ろに人の気配がしました。ハッとして振り返ると、そこには若いおまわりさんが立っていました。わたしは軽く会釈をしたのですが、おまわりさんは無言でこちらを睨んでいます。

「それは何ですか？」と、わたしが啞えているものを指さしました。「吸虫管です（前号参照）」と答えると、なぜかそのまま近くの交番に連れて行かれました。そういう時に限って学生証を忘れてしまい、大学が休日だったこともあり、わたしはなかなか解放されず1時間ほど交番に引き留められました。

その間、ひたすらアリの魅力を話したら、情熱が通じたのか解放されたのですが……。実はこのおまわりさん、わたしが啞えていた「吸虫管」がクスリ（麻薬や覚せい剤など）を吸う道具に見えたらしいのです。アリ採集をしていて、初めて苦い思い

をした出来事でした。

解放された後はというと、もちろん元の場所に戻ってアリ採集を続けました。

🍷吉澤，はやまるな!?

これもまたわたしが学生時代の話です。今から15年ほど前、長良川の河川敷には、広くて大きな藪が数カ所にありました。今ではすべての藪がテニスコートやランニング場などに変わってしまいましたが、これからお話しすることは、まだ藪が残っていた時のことです。

わたしは大学4年生になり、アリの研究室を選びました。3年生の冬に何とか車の免許をとって、この藪のある長良川へよくアリ探しに行きました。ある日、いつものように堤防のそばにある道の駅に車を止めて、河川敷によくいるウメマツアリやトゲズネハリアリの採集していると、なんだか頭上が騒がしくなってきました。今日は何かイベントでもあるのかな？と頭の隅で考えながら作業していると、誰かがスピーカーフォンで、河川敷に向かって何かを訴えはじめたのが聞こえてきました。気にはなったのですが、貴重な採集時間をむだにはできません。わたしは構わず黙々とアリを探し続けました。

それから何時間たったのでしょうか。採集を終えたわたしは、そろそろ道の駅に戻ることにしました。相変わらず堤防からは

スピーカーフォンの音が聞こえてきます。まだやってるんだなあ、と疲れた体を引きずりながら道の駅まで戻ると、突然、知らない人たちがわたしに向かって拍手をしてきました。「え？だれ？何だろう？」とびっくりして、近くにいた事情を知っていきそうな人に理由を聞いてみると……。

「女の人が一人でリュックを背負って藪の中に入ったもんだから、みんな自殺するんじゃないかと思っていたんだよ」と……。

そう、あのスピーカーフォンは、わたしに向かって自殺をやめるように訴えていたものだったのです。

そんなことがあったからかは分かりませんが、今では長良川の河川敷の多くは整備され、アリの宝庫である藪はなくなってしまいました。残念。

🍷 ハブとアリとおじさんと吉澤

大学時代の多くは、雌雄^{しゅう}モザイク（前号参照）のほかに「ハダカアリ」というアリの研究していました。このアリは沖縄県を中心に生息しているため、年に何回か沖縄に行って調査をおこないました。沖縄には助手としてわたしの父も同行してもらい、父と二人で朝の8時から夕方までアリの採集していました。

沖縄県でアリの調査しているときもまた、いろいろな人たちに声をかけられました。「何をやっているんですか？」とか、「どこから来たんですか？」などをはじめ、トイレ休憩で立ち寄り

た小さな売店では、「これどうぞ！」と切ったパイナップルをもらったり、「暑いからこれ持っていけ」と地元の人から黒糖を渡されたりもしました。沖縄は本州の人とはまたちがった温かさがあり、暑いけどアリ採集をがんばろうと思ったものです。

当時、いつものように小高い丘で父とアリ採集をしていると、現地の人らしい見知らぬおじさんが近寄ってきました。わたしたちの様子を近くでずっと見ているので、「アリ採集の様子を見て楽しいのかな……」と不思議に思っていると、ふいにおじさんが声をかけてきました。

「それ、いくらになるの？」

……わたしと父ははじめ、何のことか分からず返答に困りました。よくよく考えると、沖縄ではハブを捕まえたお金がもらえます（* 2018年現在は自治体や団体によるそうです）。アリでもそうかと聞いてきたんだろうなど、後で分かりました。

おじさん。アリの採集でも、換金はできません！

* * *

さて、今年の6月から始まったアリの撮影は、関東を中心に編集担当の荒木さんとおこないました。はじめの頃は「これはどこにでもいる“クロヤマアリ”です」「あっちは行列をつくる“トビイロケアリ”ですね」などと、一種一種説明をしながら撮影を進めていきました。荒木さんはとても熱心な方で、一

種類ずつ写真や動画に撮ってはその特徴を覚えていき、そのうちに、「あ、これはクロクサアリですね」「あそこにムネアカオオアリがいました！」と、荒木さんの方から声をかけられることが多くなりました。

そして2ヵ月後には、すっかり「アリを見つける眼（アリ眼）」を身につけた荒木さん。制作中の『身近なアリけんさくブック』は、そんな「アリ眼」が身につく画期的な図鑑です。発刊をお楽しみに！

（第3回「撮影で起こったキセキのはなし（仮）」につづく）

🐜おまけ解説①……「ハダカアリ」のひみつ

アリといえば、同じ巢のなかまとは仲が良いというイメージがあると思いますが、わたしが研究していた「ハダカアリ」はちょっと違いました。なんと、兄アリが弟アリを殺してしまうのです！

これだけ聞くと怖いアリだなあと思うかもしれませんが、これはオスの「生き残り戦略」なのです。ハダカアリ属のオスには、ふつうのオスアリと同じように翅がある「有翅型」と、翅がなく働きアリのような「無翅型」に大きく分けられます。このうち、無翅型のオスに「兄弟殺し」がみられます。先に生まれたオス（兄）は、次にサナギから羽化しようとするオス（弟）を見つけると、アゴを使って弟をバラバラにするのです。この「兄弟殺し」によって、兄は独占してメスと交尾し、自分の遺伝子だけを確実に残すことができるというわけです。

🐜おまけ解説②……父が沖縄まで来てくれたワケ

この原稿を最初に送った時、担当の荒木さんや編集部の方から「い

いお父さんだね～」と驚かれました。気になった方もおられるかもしれないので真相をここに書いておこうと思います（笑）。

父が沖縄まで何度も同行してくれたのは、半分は仕事の都合で、半分は本人がアリ採集にハマってしまったからでした。それほど、アリやアリの巣穴を見つけた時の感動は大きいものだったようです。

アリの研の4コマ

みぞぐち ともや

アリ探しの日々

